

浪江の

こころ通信

・第38号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ

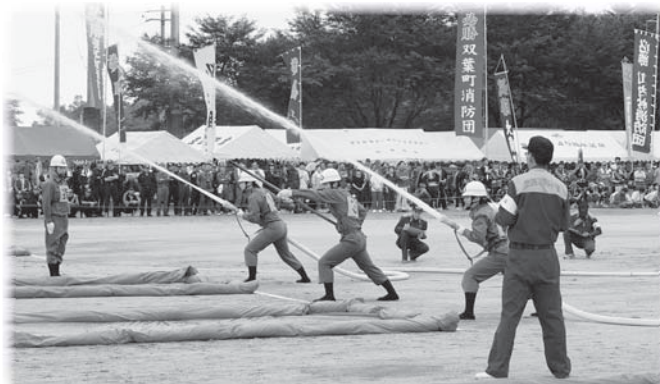
再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から3年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第38号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





西 康至さん(立野)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：7月11日

今も元気に

西さんは妻シオさんと息子の貞治郎さん、久美子さん夫婦と4人で、福島市笹谷の借上げ住宅で暮らしていらっしゃいます。

今回の取材では、康至さんのお話を貞治郎さんが補足してくださったり、剣道の資料を見せてくださったり、父子お二人からお話を伺うことができました。病後のリハビリをされているシオさんの一日も早い回復と、腰痛が辛そうな久美子さんの痛みが少しでも楽になられるといいですね。



▲家族4人、全員勢揃いで。
(左からシオさん、貞治郎さん、康至さん、久美子さん)

大地震があった3月11日は、庭の掃除などをしておりました。突然の激しい揺れに、思わずしゃがみ込みました。屋根の瓦は落ち、家の中では冷蔵庫が跳ね上がって、びっくりしました。酪農をやっていたので、牛舎の中で牛が吠えるように啼いていたのを覚えています。私たちは親子3代夫婦とひ孫2人の8人で暮らしておりました。直ぐに停電になり、水も使えなくなり、地域の酪農家と発電機を持ち回りで使っておりましたが、原発が危ないということで、家族全員で逃げましたが、

残された牛たちはどんな気持ちでいたのか、胸が詰まる思いでした。南相馬市の馬事公苑にその2日後、避難しました。その後、市が用意したバスで、伊達市の梁川体育館に移動しました。雪は降る、断水になる、余震はある、お世話してくれた方々は大変だったろうと思います。ここで家族は一旦それぞれ離れることになりました。その後、猪苗代に移り4か月お世話になり、7月下旬に酪農家の友人の紹介で、現在の家に落ち着きました。息子の話によると、「最初の一時帰宅の時はどこも草ボーボー。牛舎には苦しんだであろう牛たちが骨になって迎えてくれた。水を求めて側溝に落ちた牛の死体。あまりにも酷い光景だった」とのことでした。牛も家族の一員です。原発事故さえなかったらと思うと、怒りと悔しさで、忘れられません。また避難中は、津波で家族や家を失った方々のことを思えば、牛のことなど、とても話せませんでした。

私は、30代の時に神経性の病に罹り、3年間農業を休みましたが、剣道をするることによって

病気を克服し、その後剣道7段教士を頂き、体に自信を取り戻すことができました。苧野剣道スポーツ少年団では、若い先生方と一緒に子どもたちと稽古に励み、汗を流すのが楽しみでした。震災の1週間前、3月6日には第25回牛乳杯争奪少年剣道大会が開催されましたが、これが一区切りとなってしまい、大変残念です。各地にそれぞれ避難されましたが、その年の7月、白河で行われた中体連では、浪江町や双葉郡内の方々にお会いすることができ、大変嬉しい時間でした。



山田 正博さん(大堀)

取材者：茨城県駐在浪江町復興支援員 石田・大山・田中・八橋
取材日：6月25日

伝統工芸の技術を後世へ伝えるために・・・

浪江では、伝統工芸品の「大堀相馬焼」を作っていた山田さん。現在は、茨城県つくば市に避難しながら福島県矢吹町に工房を構え、忙しい毎日を送っています。



▲現在の山田さん



▲年末に集まった山田さん家族

■**当時を振り返って**
地震発生時は、町内のホームセンターにいました。家族と工房が心配になり急いで戻ってみると、自宅と家族は大丈夫でしたが、工房の中は足の踏み場もないくらい滅茶苦茶になっていて、手が付けられない状態でした。当然、作品も全て壊れてしまっていました。翌日から家族と親戚10人で県内外を転々とし、平成24年12月に茨城県つくば市に一旦落ち着くことができました。

■**伝統を守って**
震災後、何もすることがなく体を持って余していたところ、「何とか伝統を守っていたいかなければならない」と思い、以前からの知り合いを通じて矢吹町の工房を開くことを決めました。しかし、その工房は仮設的な建物なので耐久性もなく契約期間も5年のため、その後続けていくには「また、ゼロからスタートしなければならぬ時が来るんだな」と考えると不安になります。また、震災前一緒に仕事をし

ていた息子は現在、東京で陶芸教室の講師をしており、それが本格的になってしまつたら、一緒にできなくなってしまうのではないかと思い、震災前の暮らしを思い出すと寂しい気持ちになります。しかし、伝統工芸の技術を後世につなぐために、強い気持ちを持って、自分ができることを精一杯やっていきたいと思っています。今の頑張りが今後100年、1000年と受け継がれていくことを願っています。



高野 康幸さん(請戸)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：7月2日

浪江でのつながりも、山形でのつながりにも感謝しながら暮らしています

浪江のこころ通信第19号に掲載された高野さんご家族は、現在も3人で山形県中山町の借上げアパートで暮らしています。母・タキ子さん、康幸さんサダ子さんご夫妻、それに近くに住んでいる娘・博美さんご家族と支え合いながら生活しています。大好きな山野草を育て咲かせることがなよりの楽しみだそうです。



▲「ウチョウラン」がきれいに咲きました。
高野さんご家族(左：サダ子さん、中央：タキ子さん、右：康幸さん)

今年南相馬が相馬に引越そうかと考えていましたが、娘に「あと3年は近くにいてもらえないか」と頼まれて、もうしばらく中山町にすることにしました。ここに一緒に逃げた時から孫たちが大きくなるまでは近くにいたいと思っていました。孫の翔は山形の高校に入学し、部活動の野球も本当によく頑張っています。私も朝5時半にグラウンドまで送り届けたり夜遅く迎えに行ったり。妹の稜もバスケットボールを始め、父親母親も仕事にPTAにと忙しいよう

です。母は今年94歳になりましたが、どこも悪い所痛い所がなく体に変わりなく安心して暮らしています。藤は花芽も持つていて当時とても元気づけられました。ですがその後、木は跡形もなくなりました。先日帰宅した際、土地の上には大きなコンクリートが移動されていました。自宅の姿形はなくなりました。自分の土地には変わりましたが、自分の土地には変わらぬ、大切にしていた想い出があり、荒れていく土地を見ると憤りをどこに向けたらいいのか分からない時もあります。

今も浪江町には必ず春、お盆、秋と墓参りに帰っています。地区によっては、車の中でも線量計の警報が鳴る場所もあり、線量が高い場所もあるというところを実感する時もありました。先日、集団移転の意見交換会に参加し説明を聞きました。住む場合生活に欠かせない



今野 秀則さん(下津島)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：7月9日

人がつながって生きていくことや、ふるさとの祭、伝統芸能。そういった全てが断ち切られたことが、悔しくてなりません。

震災当時、今野さんは(社福)福島県社会福祉協議会に勤務され、同時に下津島地区の行政区長さんも務めておられました。その今野さんは、地区の人々16人から聞き取った被災の記録『3.11ある被災地の記録 浪江町津島地区のこれまで、あの日、そしてこれから』を上梓され、読売新聞(2014年7月6日福島版)などに大きく取り上げられました。

今回は、奥さまの芳子さんと共に「聞かれる側」になっていただき、震災当日から今日までのこと、ご近所や地域での交流など、さまざまなお話を伺いました。



▲仲睦まじく、素敵な笑顔を見せてくださった秀則さんと芳子さん。芳子さんは避難後、いろいろな会に参加するなど、ご自分の趣味を楽しむ時間が増えたそうです。

■私は福島市の仕事場で、妻と娘は外出先の原ノ町で、大震災に遭いました。物凄い揺れに、立って歩けないほどでしたが、机上のパソコンを手で押さえながら収まるのを待ちました。職員と共に外へ避難したものの、歯の根も合わないほど寒かったし、極度の緊張もしていました。頻りに余震があり、その度に駐車場の車が大きく揺れました。急いで家族に連絡を取りましたが、自宅にも子どもたちにもつながらず、そのうちようやく娘からメールが来て無事を知りました。

芳子さんによると「原ノ町でも大きな揺れだったので、原ノ町トンネルを避けて山麓線で帰ろうとしたけれど、馬事公苑の辺りでこの先は通行できないと言われまして。国道6号に出ようとしたが、思い返して原ノ町トンネル経由で戻りました。あのまま走っていたら津波に遭っていたかもしれない。今思うと、本当に怖いんです。原ノ町は多くの家の瓦が落ち、大変なことになるっていました。」

■翌日から4日間、津島は人と車で溢れていました。12日早朝、町から大勢の町民が津島に避難をするので地区の集会所で受け入れをして欲しいとの要請があり、役員の方々とその準備に追われました。また、我が家は元々旅館と煙草の小売を営んでおり、幾世橋の恩師家族をお泊めしたり、煙草を売ったりしていました。津島の人口は1,400人程ですから、7倍を超す1万人以上が避難して来たと思います。小中学校のグラウンドから溢れた車が路肩に駐車。その間を進もうとする